
魔法少女リリカルなのは～極限の力～

akira

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜極限の力〜

【Nコード】

N3323Z

【作者名】

akira

【あらすじ】

俺は急に神と名乗る人物から「世界を救ってほしい」と頼まれた。渡された力は極限の力：エクストリームガンダム。魔法少女リリカルなのは〜極限の力〜が始まります。

「さあ、極限の希望を感じる。」

魔法少女リリカルなのはとエクストリームVSとのクロスです。不定期更新ですがお願いします。

ブローグ〜極限の力〜(前書き)

初めましてakiraです。

エクストリームVSをやってて急に書きたかったので書きました。
後悔はしてない。

プロローグ〜極限の力〜

気がついたら真っ白な空間にいた。

あれ？確かエクストリームVSをやってたんだよな、俺。

「気がついたかの？」

「おわ！」

「そんなに驚かんでもええじゃろうに。最近の若い奴らは直ぐに驚く。」

若い奴らじゃなくても驚くわ。

「まあ、ええ。とりあえず自己紹介しとこうかの。わしはお前さんたちで言う神と言う者だ。」

「え？神様？」

「と言っても思念体みたいなもので今の子の姿はお前さんたちのイメージしている神の姿でおるだけじゃ。」

「ふーん。でその神様が俺に何の用？」

「実はお主を見込んで頼みがある。」

頼み？

「パラレルワールドは知っておるじゃろう。可能性の分だけ世界が

あるという別世界の事じゃ。」

うん、知ってるよ。だてに二次小説読んでるわけじゃないんだし。

「実はその世界の一つを救ってほしいんじゃないよ。」

「なんで？」

「『リリカルなのは』は知っておるじゃろう？その世界で管理局と
言う組織がいることを。」

あー。そう言えばそんな組織いたわ。

俺、時空管理局あんまり好きじゃないんだよね。

だってまだ9歳の子供に戦場向かわすってどんな精神してるって話
じゃん。

「とある世界では管理局が大幅に改善された世界もあれば、そのま
まの世界もある。

しかし、今回の世界では管理局の行為があまりにも酷いものでの。
わしを含めた各神達の会合で

その世界の管理局に介入することにしたのじゃ。」

「ちなみにどんな？」

「…酷いもんじゃ。あの冷酷な冥界の王さえも涙を流したのじゃ。

お前さんと同じ人間なのにあそこまで非道な事が出来るのかと思うと
身震いするわ。」

どうやらかなり酷いことをしてるらしいな…。

まあ、最高評議会のトップは脳味噌だしな。考えることが逸脱して

んじゃね？

「しかし、我らが直接介入すれば世界に影響が及ぶ。そこでお主に白羽の矢が立ったのじゃ。」

「俺？」

「お前さんは特異点…。他世界に介入しても影響を及ぼさない存在なのだ。」

それにお主は心優しい人間じゃ。悲しい人を救う力を持つてるんじやよ。」

…自覚ねえ。

「ふおおおお…。こればかりは自覚できんよ。」

さて長話はこれでおしまいじゃ。お主には直ぐに飛んでもらう。」

「おい。ちょっと待て。俺は元の世界に戻れるのか？」

「元の世界にはお主はきちんという。」

慈愛の神からの要望でな、今のお前さんは精神体で元の世界にはきちんとお主はおる。」

これは大切な人達を悲しませたくないという配慮じゃ。」

そっか…なら安心した。」

「それとお主にこれを渡しておく。」

俺の身体が蒼白く光りだした。」

「お主がやっていたゲーム…。エクストリームV Sかの？
そのラスボスの機体をお主の身体と同化させた。」

ラスボスの機体：エクストリームガンダム！？

「もちろん3つの支援パーツも揃えておるし、お主の意思次第で戦闘フィールドをラスボスの専用ステージに出来る。それと非殺傷設定にもできる。」

ありがたい。元々エクストリームはカルネージ・タキオン・イグニスの3つのフェイズで真の力が発揮できる。それにエクストリーム・ユニバースなら周りの人や建物を破壊せずに済むからな。

「大体はこんな所じゃ。何か質問は？」

「無い。じゃあ行ってくるよ。」

そう言っただけの意識は薄れっていった。

神 side

「頼んじゃぞ…。あの世界に極限の希望を与えられんこと…。」

神はそう言っただけで粒子となって消えた。

プログラグく極限の力く（後書き）

駄文ですがよろしく願います。

出会は唐突に、悲しみを受け入れる者、（前書き）

連続投稿です。

出会は唐突に、悲しみを受け入れる者、

「ん…？」

眩しい…。俺は少しずつ目を開ける。

真っ先に目に飛び込んだできたのは見知らぬ天井だった。

「あ。気がつきました？」

俺は起き上がると声をかけられた方向に向く。

車椅子に座った少女―八神はやてとの出会いだった。

はやて side

うちの名は八神はやて。広いお家で一人で住んでる。

両親は二人とも事故でなくなってもうた。

でも生活は遠い親戚のおじさんが見てくれるから大丈夫なんやけど。

「あ、ご飯作らな。」

うちはベットを降りて車椅子に座る。

いつかは知らんけどうちの足は悪くて車椅子で生活してる。

と言ってもつらくはないんよ？だって今まで一人で生きていたから…。

「うんしょと。」

服を着替えた後、うちはリビングに行く。
そこはいつもの風景…じゃなかった。
ソファアのすぐそばで男の人が倒れてた。

「ど、泥棒…!？」

うちは直ぐに通報しようかと思ったけど、男の人を見てなぜか通報する気がなくなった。

なんて言うんやろ…?なんだか…とても暖かい感じがするからかな?とoriaえずうちは男の人に毛布を被せて朝ごはんを作り始めた。時々様子を見たけど、まったく起きない。

朝ごはんを作り終えたとき、男の人に近づくとどうやら気付いたよ
うや。

「あ。気がづきました?」

「…君は?」

男の人はどうやら驚いている様子。うん、この人が泥棒ってのは無いな。

「八神はやてって言います。お兄さんは?」

うちが自己紹介すると、お兄さんは少し考え始めた。
そんなに自分の名前を言うのに考えるものかな?

「俺の名は…e^{イクス}xだ。」

それがお兄さん…イクスさんとの出会いだった。

イクス
| side

ふう…危ない。

俺の本当の名前は元の世界のモノだ。ならここに居る俺はエクスト
リームガンダムを動かしていた
思念体：イクスだ。管理局に極限の絶望を送るための。

「所でイクスさんはどうしてうちの床で倒れてたん？」

俺は彼女の家に倒れていたのか。

あの神め、迷惑をかけるな。責任を負わされるのは俺だぞ！

「すまないな。俺もよくわからないんだ。」

とりあえずこう答えておく。

実質どうしてこの場所に来たのか俺にもわからない。嘘は言ってな
い。が本当の事も言っていないがな。

「そうなんや…。あ！しもうた！」

はやてはキッチンの方へ言った。
そう言えばなにやら焦げ臭いな。

「ああ…。焼き鮭が炭に〜。」

…どうやら鮭を炭に変えてしまったようだ。

「すまない。どうやら俺のせいらしい。…」

「うっん！そんなことあらへん！元々うちが忘れてたせいやし！」
はやては手を振って答える。
俺はテーブルを見て気付いた。
食器が二人分あるのだ。

「はやて、この食器は誰のだ？」

「うちとお兄さんの分やで？」

何？

俺の？

「何故俺の分を？」

「お腹が減って倒れたんかな〜と思ってな。」

∴ 普通は警戒するか警察に通報するかだと思っぞ。
俺ならいきなり朝食と一緒に食べようなどとは思わん。

「それに誰かと一緒に食べるなんて久しぶりなんよ…。」

はやてがそう言つと悲しい顔になる。

そうだった…。

はやてのご両親は事故で亡くなっているのを忘れていた。

∴ 彼女は孤独、そして俺も。

なら俺に出来ることは。

「はやて。」

俺ははやての頭に手を置く。

「ふえ？」

「ご馳走になるよ。」

俺がそう言うとはやては満面の笑みになる。

「うん！ほな準備するから待っというてな！！」

はやては嬉しそうにして準備をし始めた。

そして朝食と一緒に食べる。

メニューはご飯、みそ汁、そして炭になった焼き鮭という和食の王道だ。

一緒にご飯を食べている途中、俺ははやてに有る提案を出した。

「はやて、俺は君の家族になりたい。」

「え？」

「俺も孤独だったんだ。両親はいないし、友達もいない。

ずっと一人で生きてきた。でも、今はやてとこうやっていると
思うんだ。

俺は一人じゃないんだって。」

「…。」

「君が良ければ、俺は君の家族になる。どうだ？」

「ほんまに…、ほんまにうちの家族になってくれるん？」

「ああ。」

するとはやての目から涙があふれてきた。

「あ、あれ？なんでやる？なんで泣いてるんやろ？嬉しいはずなのに…、涙が止まらへん。」

泣き続けるはやてに俺ははやての所に行き、抱きしめた。

「辛かったな…。」

「…。」

「寂しかったな…。」

「…っ。」

「でも、もう我慢しなくていい。」

「う、うえ…。」

「俺がはやての家族になるから。」

「うわあああああああん！…！」

はやては泣きだした。

今まで寂しかった孤独を吐き出すように。
俺はただ彼女を抱きしめるだけだった。

神 side

わしは今送り込んだあの男「ex」^{イクス}の様子を見ている。
どうやら主要人物の一人、八神はやてとの接触到に成功したようじゃ
な。

そして今、ex^{イクス}が八神はやてを抱きしめておる。

「そうじゃ。それがお主の力なのじゃ。気づかんでもええ。ただそ
うするだけで人は救われるのじゃ。」

だからこそわしは彼を推薦した。

人の弱さを認め、それを受け入れる彼を。

彼ならばこの先起きる悲劇を喰い止めれるじゃろつ。

頼んだぞ…。

出会いは唐突に、悲しみを受け入れる者、（後書き）

如何でしょうか？

シリアスな雰囲気が出れば幸いです。

…出てくるかすごく不安ですが。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3323z/>

魔法少女リリカルなのは～極限の力～

2011年12月11日15時48分発行